

Havelok the Dane について

菅 野 正 彦

Havelok の冒険が初めて文献に現れるのは、1147 年から 1151 年の間にアングロ・ノルマンの吟遊詩人 Geffrei Gaimar によって書かれた『英国史』(*L'Estorie des Engles*) の中である。また、12 世紀末に書かれたフランス詩『ハヴェロックの歌』(*Lai d'Haveloc*) では、この英雄だけが語られている。これらの版は、「イギリス物」(*The Matter of England*) と呼ばれる『デーン人ハヴェロック』(*Havelok the Dane*) と同様に、最終的には共通の原典に帰着するのである⁽¹⁾。しかし、その原典と *Havelok the Dane* との間に、現在では失われた別の英語版があったと想定される。Speirs は英語版とフランス版とは直接の関連はないと述べている。その理由として、フランス版と比較して英語版には「雅び振り」「courtliness」が欠けているからである⁽²⁾。14 世紀、15 世紀になると再び年代記作者はこの伝説に言及するようになる。特に、1338 年に書かれた Robert Mannyng of Brunne の *Handlyng Synne* はその代表格である⁽³⁾。

Havelok 伝説にはスカンジナビアの歴史的に実在した名前が登場するが、確実な証拠は得られない⁽⁴⁾。比喻を使うと、*Havelok the Dane* は民間説話から紡ぎ出された織物のようなものである。Skeat によれば、口から出る光は Servius Tullius の伝説に現れ、また征服の幻覚を見たり、力技を競うゲームや祝祭の描写等は中世のロマンスでは珍しい現象ではなく、それと類似した表現に遭遇することはよくある⁽⁵⁾。その他様々な関連が指摘されているが、何れにしても事実らしさを語って聴衆の関心を引くために、民間説話の領域に歴史が侵入するようになり、荒唐無稽なお伽話は次第に影を潜める。制作年代は 1300 年より前で、場所は Lincolnshire と推定される。伝説によると、Havelok の養父 Grim は Grimsby の町を建設した英雄に祭り上げられ、*Havelok the Dane* はこの伝説と深い関係を有するようになる。今でも Grimsby の町には、Grim と Havelok の像が彫られたシールが存在している⁽⁶⁾。

フランス版では Havelok は Cuaran と呼ばれ、それはケルト語で「粗革製の靴」“a sock or a brogue of untanned leather or skin” という意味で、有名なヴァイキング Olaf Sicticson の異名と考えられる⁽⁷⁾。英語版に北欧語が頻出するのは、多数のデーン人が定住した North-East Midlands の言葉でそれが書かれているからである⁽⁸⁾。ノルマン征服以前のイギリスとデンマークとの関係を彷彿させる記述が随所に見られるが、それらは歴史的(事実)というよりも神話的(虚

構) な記述であると Speirs は述べている⁽⁹⁾。

Havelok the Dane は、文学的センスと教養を十分に身につけた宮廷人を意図して書かれたものではない。*King Horn* に比べて宮廷的・騎士的要素が不足しているので、これは町の広場で開かれる市の日などに、楽人たちによって吟唱されたのであろうと、Karl Brunner は推測している⁽¹⁰⁾。

しかし、ロマンスとしては非常に優れており、複雑な言い回しはなく、全て単刀直入で明晰である。特に戦闘と冒険に重点が置かれ、繊細な感情表現は殆ど見当たらない。物語の背景は13世紀のイギリスであり、民衆の社会生活の一端を如実に写し出している⁽¹¹⁾。従って、Speirs も指摘するように、*Havelok the Dane* は大衆のために作られた物語の特徴を豊富に備えている⁽¹²⁾。冒頭の詩行は「吟遊詩人の朗読」‘minstrel recital’のみならず、「ご婦人、娘さん、すべての皆さん」“Wiues, maydnes, and alle men”と親しく呼び掛けて、聴衆を自分の方へ引き付け、騒がしい人達を鎮めている。話を始めるに際して「上等のエールをなみなみと一杯」“a cuppe of ful god ale”という愛嬌たっぷりの口調から察すると、楽人は領主の館か居酒屋あたりで吟唱しているのであろう。

Herknet to me, godemen,
Wiues, maydnes, and alle men,
Of a tale þat ich you wile telle,
Wo-so it wile here and þer-to duelle.
þe tale is of Hauelok imaked ;
Wil he was litel, he yede ful naked.
Hauelok wa a ful god gome :
He was ful god in eueri trome ;
He was þe wicteste man at nede
þat þurte riden on ani stede,
þat ye mowen nou yhere,
And þe tale ye mowen yhere,
And þe biginning of vre tale,
Fil me a cuppe of ful god ale ;
And wile [y] drinken, her y spelle,
þat Crist vs shilde alle fro helle!
Krist late vs heuere so for to do
þat we moten comen him to ;
And, witþat it mote ben so,
B[e]nedicamus Domino!

Here y schal biginnen a rym ;
Krist us yeue wel god fyn!
The rym is maked of Hauelok,
A stalworpi man in a flok ;
He was þe wihttest man at nede
þat may riden on ani stede. (1-26)⁽¹³⁾

この引用に、静聴の要請、主題の解説、興味深い事柄、聴衆の平安、精神の高潔、道徳の向上等の内容が一杯詰まっている⁽¹⁴⁾。

声に出して伝達する (oral delivery) 技法として、語句や文の繰り返し (repetition) は非常に重要である。一度で十分な場合でも、二度まで同じ内容が繰り返されることがある。例えば、“gode men” (1) と “alle men” (2), “a ful gode gome” (7) と “ful god” (8), “y-here” (11) と “y-lere” (12) 等の繰り返しは冗漫と思われるが、ロマンスではごく当たり前のことであった⁽¹⁵⁾。

Havelok は冒頭から “a ful god gome” (7) と賛美される。幼少の頃は不遇であったが、成長するに従って、次第に強力で誠実な人間となり、最後に幸運を手に入れる。不運から幸福へという変化が典型的な英雄像であり、これが民衆に感銘を与える大きな要因であった。

He was þe wicteste man at nede
þat þurte riden on ani stede. (9-10)

後に (25-26) 「最強の人」という表現が繰り返されるが、これは民衆に平和と幸福をもたらす資質として、王権に欠くことができない重要な能力であった⁽¹⁶⁾。

当時、イギリス人は平和と正義を希求した。そこで、平和に国を治めたと伝承される善王 Athelwold をもって、楽人は物語を始める。“þanne was Engeland at hayse” (59) の表現は、13 世紀のイギリスが確実に失っていたあの古き良きサクソン時代への郷愁であろう⁽¹⁷⁾。王の死と、厳粛な葬礼に関する感動的な描写が続く。王は臨終に際して、彼は幼い一人娘 Goldeboru が「雅び振り」“curtesye” を身につけ、「求愛」“luue-drurye” を語る年頃まで養育して、立派な強い人と結ばせて欲しい、とコーンウォール伯・Godrich に頼む。しかし王の意に反して、彼女を城に幽閉し、自分の子をイギリス王に就ける策を巡らす。物語の中で、彼は「極悪人ユダ」“a wicke traytur Iudas” (319) と呼び捨てにされている。Godrich の独白 (interior monologues) を通して、彼の邪心と欲望が時空を超えて鮮明に伝わってくる。

þo bigan Godrich to sike,
And seyde, “We er she sholde be
Quen and leuedi ouer me?
Hweþer sho sholde al Engeland,
And me, and mine, hauen in hire hond?”

Dapeit hwo it hire thaue!
Shal sho it neuere more haue,
Sholde ic yeue a fol, a þerne,
Engelond, þou sho it yerne?
Dapeit hwo it hire yeue
Euere-more hwil i liue!
Sho is waxen al to prud,
For gode metes, and noble shrud,
Þat hic haue youen hire to offte ;
Hic haue yemed hire to softe.
Shal it nouth ben als sho þenkes :
Hope maketh fol man ofte blenkes.
Ich haue a sone, a ful fayr knaue :
He shal Engelond al haue!
He shal king, he shal ben sire,
So brouke i euere mi blake swire!” (290-311)

諺や俚言が多用されるのもこの物語の特徴である。“Hope maketh fol man ofte blenkes.” もその一つである。現在でも “Hope often deludes the foolish man.” や “Too much hope deceives.” というように使われている⁽¹⁸⁾。「過度の希望は人を欺く」という諺であるが、Godrich の邪悪な性格がよく表れている。また “So brouke i euere mi blake swire!” も典型的な成句的誓言 (a typical idiomatic asseveration) である⁽¹⁹⁾。

Godrich は Goldeboru を海辺の城 (Dover Castle) に幽閉する。イギリスの情勢がデンマークのそれと並行して語られる。デンマークでは、Birkabeyn 王が、二人の若い娘と一人の息子・Havelok を残して亡くなる。前述したように、三人の子どもを “A rich man” (373) で “þe trewest” (374) と思われた友人の Godard に託す。実は、彼もユダに似た「極悪な裏切り者」 “wicke traitour” (665) なのだ。並行して語られる類話は、一般に “parallelism” と呼ばれる。Godard は三人を塔に幽閉して、空腹と寒さに晒した後、Havelok の眼の前で姉妹を溺死させる。後述するように、Grim 夫婦が Havelok を奇跡的に助ける。

Hwan þat was þouth, onon he ferde
To þe tour þer he woren sperde,
þer he greten for hunger and cold.
þe knaue, þat was sumdel bold,
Kam him ageyn, on knes him sette,
And Godard ful feyre heþer grette.

And Godard seyde, “Wat is yw?
Hwi grete ye and goulē nou?”
“For us hungreth swiþe sore,”
Seyden he, “[We] wolden more :
We ne haue to hete, ne we ne haue
Herinne neyther knith ne knaue
þat yeueth us drinke, ne no mete, --
Haluendel þat we moun ete!
Wo is us þat we weren born!
Weilawei! nis it no korn
þat men micte maken of bred?
Us hungreth : we aren ney ded!” (447-64)

以下の会話の中に Godard の悪意に満ちた仕打ちと、それに対する子供たちの抗議が鮮やかに語られている。

“Wat is yw?
Hwi grete ye and goulē nou?” (453-54)

“Weilawei! nis it no korn
þat men micte maken of bred?
Us hungreth : we aren ney ded!” (462-64)

幼い子供たちの必死の叫びが、短い一音節か二音節の言葉で表現される。使用される語彙は全て本来系 (OE.) か、定着した北欧系 (ON.) である。精彩に富んだ剥き出しの会話である。空腹への言及は、この後 (826ff.) にも現れる。この描写は現実生活へ引き戻す働きをしている。

これに対する Godard の返事は、以下のものであった。

Godard herde here wa,
þeroffe yaf he nouth a stra,
But tok þe maydnes boþe samen,
Also it were up-on hiis gamen-
Also he wolde with hem leyke,
þat weren for hunger grene and bleike.
Of boþen he karf on two her þrotes,
And siþen, hem al to grotes.

Per was sorwe, wo-so it sawe,
Hwan þe children bi þe wawe
Leyen an sprauleden in þe blod :
Hauelok it saw, and þe[r] bi stod.
Ful sori was þat seli knaue,
For at hise herte he saw a knif
For to reuen him hise lyf. (465-80)

“Ful sori” は、単に「悲しい」という意味ではなく、悲惨さをも同時に含んでいる⁽²⁰⁾。この物語には、二人の主要人物が登場する。Havelok の養い親となる漁師の Grim と、その妻 Leue である。前述したように、Grim は Grimsby の伝説の建設者である。Godard は自分に代わって、Havelok が王になることを恐れた。そこで、Grim に少年を海に沈めるように命令した。成功の暁には、奴隷の身を解き、報酬として黄金を与えると彼らに約束した。

In a poke, ful and blac,
And bar him hom to his bac,
And bar him hom to his cleue,
And bitaucte him dame Leue,
And seyde, “Wite þou þis knaue,
Also thou with me lif haue :
I shal dreinchen him in þe se ;
For him shole we ben maked fre,
Gold hauen ynou, and oþer fe :
Þat hauet mi louerd bihoten me.” (555-64)

Grim の妻 Leue も、夫と同様に身分の低い女であった。最初、夫婦は Havelok の出生の秘密を知らなかったので、妻は子供を地面に落としたり、頭を石に打ちつけたりして、いいかげんな扱いをしていた。奇妙なことに、この手荒な行為に対する夫婦の謝罪や弁明には、後に詩人は全く触れていない。

Hwan dame [Leue] herde þat,
Vp she stirte, and nouth ne sat,
And caste þe knaue so harde adoune,
Þat he crakede þer his croune
Ageyn a gret ston, þer it lay : (565-69)

Grim が夜中に目を覚まして、妻にローソク (a kandel) を灯すように言った。その時、彼女は子供の口から光が出ているのを目撃した。

Als she schulde hise cloþes handel
On forto don, and blawe þe fir,
She saw þerinne a lith ful shir,
Also brith so it were day,
Aboute þe knaue þer he lay.
Of hise mouth it stod a stem
Als it were a sunnebem : (586-92)

Grim と Leue は、太陽光線に似た不思議な光によって、Havelok が王家の生まれ (royal birthmark) であることを確信した。また、その少年の肩に王の印 (On his rith shuldre a kyne-merk 604) が付着していることによって、その確信は揺るぎないものとなった。この描写は後に二回 (1264-65, 2144-52) 繰り返される。まるで手の平をかえすように、彼女はその子供に「パンとチーズ、バターとミルク、ミート・パイとチーズ入りケーキ」'Bred an chese, butere and milk, Pastees and flaunes 643-44) を与えた。これは非常に生々しい描写である。

約束のものを Godard に要求すると、つれなく拒否された。悪漢 Godard は約束を破ったのである。そこで、Grim は危険を察して、妻子と Havelok を連れて逃げることになる。穀物や家畜を売って現金にして、デンマークからイギリスまでの海上逃避行の準備に取り掛かる。これらは写實的に描かれている。

Grim solde sone al his corn,
Shep wit wolfe, neth wit horn,
Hors, and swin, [and geet] with berd,
þe gees, þe hennes of þe yerd ;
Al he solde, þat outh douthe,
þat he eure selle moucte,
And al he to þe peni drou.
Hise ship he greyþede wel inow :
He dede it tere, an ful wel plike,
þat it ne doutede sond ne krike ;
þer-inne dide a ful god mast,
Stronge kables, and ful fast,
Ores gode, an ful god seyl ;
þerinne wantede nouth a nayl,
þat euere he sholde þerinne do. (699-713)

船は無事にハンバー河の岸边に辿り着いく。(Gower の *Confessio Amantis* や Chaucer の *The*

Man of Law's Tale に出るコンスタンスが流れ着いたのも、ハンバー河であった。) Grim らは上陸して、そこに小屋を建てた。前述したように、これが Grimsby という町の起源である。最初、彼らの生活は順調であった。漁師の Grim が網や釣り針で「チョウザメ、鯨、鱒、アザラシ、鰻、鱈、海豚、ニシン、鯖、カレイ、アカガレイ、ガンギエイ」`sturgion, qual, turbut, lax, sele, whel, keling, tumberel, hering, makerel, butte, schulle, ornebake' (753-59) を取り、売ってお金を得て (to selle and fonge 763) いた。当時のロマンスとして興味を引くのは、魚類の名前で、しかもこれらはイギリスとデンマーク間の荒海に実際に生息する魚や動物である。

実は、このロマンスでは現実的な話と伝説的な話が混在しているのである。この物語が他のロマンスと異なる主要点として、綿密な現実描写ではなく正確な社会描写であると Schmidt 達は指摘している⁽²¹⁾。生々しい描写がある反面、帆で着物を作る (853-56) 描写は、人々に生きる知恵を教える。特に、これが聴衆の興味を引いたのかも知れない。王の息子であり、真の英雄 Havelok が貧しい Grim の小屋で成長し、養ない親の家事仕事を一生懸命に手伝う。「働くことは恥ではない」“It is no shame for to swinken” (799) というのが、彼の生活信条であった。この中に、勤勉と労働に関する教訓的な教えが込められているのであろう。

On þe morwen, hwan it was day,
He stirt up sone, and nouth ne lay ;
And cast a panier on his bac,
With fish giueled als astac ;
Also michel he bar him one
So he foure, bi mine mone!
Wel he it bar, and solde it wel ;
Þe siluer he broughe hom il[k] del,
Al þat he þer-fore tok. (811-19)

12 年間、陸と海の豊作が続いた後、やがて凶作が襲う。Havelok は仕事を求めて Lincoln に行く。コーンウォール伯の料理人の召使として働く。若者が厳しい世間に出て、富を得て帰って来る。それに王国まで獲得するのである。家を離れる時、Grim は Havelok を帆でくるむ。

He tok þe sh[e]res of þe nayl,
And made him a couel of þe sayl,
And Hauelok dide it sone on.
Hauede [he] neyþer hosen ne shon,
Ne none kines oþe[r] wede ;
To Lincolne barfot he yede.
Hwan he kam þe[r], he was ful wil :
Ne hauede he no frend to gangen til ;

Two daes þer fastinde he yede,
at non for his werk wolde him fede ;
þe þridde day herde he calle :
“Bermen, bermen, hider forth alle!”
[Poure þat on fote yede]
Sprongen forth so sparke of glede.
Hauelok shof dun[e] nyne or ten
Rith amidewarde þe fen,
And stirte forth to þe kok,
[þer the erles mete he tok]
þat he bouthe at þe brigge :
þe bermen let he alle ligge,
And bar þe mete to þe castel,
And gat him þere a ferþing wastel. (857-78)

日常生活から採られたと思われる情景も描かれている。Lincoln の橋の上に立って、運搬人の仕事を探す Havelok の姿は特に印象的である。「運搬人」を表す “bermen” や、「籠」を表す “rippe” はその地方の言葉であった⁽²²⁾。

Havelok が重い荷を担いで城まで行くと、料理人は見込みのある若者と見込んで、下人として雇うことにした。彼は水や薪を運び、皿を洗い、火を起こし、鰻を料理し、あらゆる卑しい家事をこなした。しかも、彼は喜んで仕事をして、次第に並外れた非常に強い、育ちのいい人間に成長する。このように、王としてではなく、普通の人間として心の強さや力の程度が試されたのである。

特に、競技の場面が最も聴衆の興味を引いたであろう。村のグリーン（共有地）にイギリス各地から、力自慢の若者が大勢集まって来る。Havelok も正体を隠してそれに参加する。彼が投げた石は、非常に大きく、雄牛 (neth) ほどの重さがあったと言う。

þe ston was mikel and ek greth,
And al so heui so a neth. (1025-26)

力技で勝利を収め、この能力は神か英雄に帰せられ、人々の寵愛の的となる。やがて、この評判は悪漢 Godorich の耳に届き、彼を Goldeboru と結婚させようと密かに企む。結果的に、二人はデンマークとイギリスの王と女王になるので、この策謀は典型的な “dramatic irony” となるが、このように、彼の動機は初めから徹底的に邪なのである。彼女をイギリス中で一番の力持ちに結び付けて、名目的に亡き王との約束を守る、と同時に身分の低い作男の男と結びつけることによって、王権から排除しようと企んでいる。

次に述べられている行事は、儀式に先立って行われた当時の習慣と思われる⁽²³⁾。

þer weren penies þicke tolde,
Mikel plent “ upon þe bok :
He ys hire yaf, and she is tok.
He weren spused fayre and wel,
þe messe he dede--eueridel
þat fel tospusing--a god cle[r]k,
þe erchebishop uth of Yerk,
þat kam to þe parlement,
Als God him hauede þider sent. (1172-80)

初めは、卑しい男と結婚したことを Goldeboru は嘆き悲しむが、夜に Havelok の肩に真っ赤な高貴な十字の印と、口から出る光線を目撃したことで、彼が王家の生まれであることを知る。

On hise shuldre, of gold red
She saw a swiþe noble croiz ;
Of an angel she herde a uoyz : (1262-64)

語り手は “Goldeborw, lat þi sorwe be” (1265) と述べている。

ロマンス作者は更に面白い武勇伝を創り出す。ある夜、Havelok 夫婦と賄い方の Bernard が泊まった屋敷に強盗一味が押し入る。戸のつかい棒の一撃で三人の強盗を殺害する。結局、「頭が星に晒されなかった者」は一人もいない。この荒唐無稽な表現によって、Havelok の勇敢さ (prowess) が証明され、聴衆の興奮を盛り上げ、拍手喝采を博したであろう。

Hauelok lifte up þe dore-tre,
And at a dint he slow hem þre ;
Was non of hem þat his hernes
Ne lay þerute ageyn þe sternes. (1806-9)

Havelok は妻と Grim の3人の息子と共にデンマークへ帰る。行商人に変装して Ubbe と再会する。Ubbe は Havelok の父 Birkabeyn から保証人として金の指輪 (a gold ring) を受け取っていた。その指輪には “He was ful wis þat first yaf mede” (1635) と刻まれていた。しかし、Ubbe は口から出る光 (a mikel lith 2093) によって、行商人は Havelok であると見破る。

So weren he war of a croiz ful gent
On his rith shuldre, sw[iþ]e brith,
Brighter þan gold ageyn þe lith,
So þat he wiste, heye and lowe,

Pat it was kunmerk þat he sawe. (2139-43)

Ubbe は Havelok を騎士に叙任し, Havelok は国王となった。

Hwan he was king, þer mouthe men se
Pe moste ioie þat mouhte be :
Buttinge with sharpe speres,
Skimming with taleueaces þat men beres,
Wrastling with laddes, putting of ston,
Harping and piping, ful god wo,
Leyk of mine, of hasard ok,
Romanz-reding on þe bok ;
Per mouthe men here þe gestes singe,
Pe glevmen on þe tabour dinge ;
Per mouhte men se þe boles beyte,
And þe bores, with hundes teyte ;
Po mouthe men se euerli[k] gleu. (2320-32)

あらゆる娯楽 (gleu) が披露される。目を見張るような宴が開かれ, 衣服 (clopes) や食べ物 (gode metes) が参加者に振る舞われ, まるで「海の水のように」“So it were water of þe se” (2343) ワインがつかれたと楽人は語る。

敗れた Godard を縛り首にし, Havelok はデンマーク王となり, 再びイギリスに渡り, Godrich を捕らえて焚刑に処した。ロンドンで戴冠式が盛大に行われ, Havelok と Goldeboru は正式に王と女王となった。王として 60 年間よい政治を行い, その間に 12 人の子供を儲け, 男の子は全て王に, 女の子は女王となる。このように, 物語はハッピーエンドで終わる。

注

- (1) Skeat, W. W., *The Lay of Havelok the Dane*, rev. by K. Sisam (Oxford : Clarendon Press, 1967), pp. xi-xvii.
- (2) Speirs John, *Medieval English Poetry : The Non-Chaucerian Tradition*, (London : Faber and Faber, 1957 ; 1958). p. 192.
- (3) Skeat (pp. xxi-xxii), 及び L. A. Hibbard, *Mediaeval Romance in England: A Study of the Sources and Analogues of the Non-Cyclic Metrical Romances* (New York : Burt Franklin, 1960), p. 105 を参照。
- (4) Billings, A. H., *A Guide to the Middle English Metrical Romances* (New York : Russell & Russell, 1901 ; 1967), p. 271.
- (5) Skeat, op. cit., pp. xxi-xxii.
- (6) Speirs, op. cit., p. 192.
- (7) Skeat, op. cit., p. xxv.
- (8) Speirs, op. cit., p. 191. 方言のこと。

Bennett A. W., *The Oxford History of English Literature : Middle English Literature*, ed. and completed by

- Douglas Gray (Oxford : Clarendon Press, 1986). p. 159.
- (9) Speirs, op. cit., p. 192.
- (10) Brunner, Karl, "Middle English Metrical Romances and Their Audience" : *Studies in Medieval Literature : In Honor of Professor A. C. Baugh*, ed. M. Leach (Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press, 1961 ; 1964), p. 223.
- (11) Wilson R. M., *Early Middle English Literature* (London : Methuen, 1939), p. 34.
- (12) Speirs, op. cit.,
- (13) 引用は全て, *Middle English Metrical Romances I* (1930 ; New York : Russel & Russel, rpt. 1964), ed. by French W. H., and C. B. Hale による。
- (14) French and Hale, op. cit., p. 74.
- (15) Schmidt, A. V. C. and Nicolas Jacobs (eds.), *Medieval English Romances I* (London : Hodder and Stoughton, 1980), p. 173.
- (16) Bennett, *The Oxford History of English Literature : Middle English Literature*, edited and compl. by Douglas Gray (Oxford : Clarendon Press, 1986), p. 155.
- (17) Bennett, op. cit., p. 155.
- (18) Fergusson, Rosalind (ed.), *The Penguin Dictionary of Proverbs* (Penguin Books, 1983), p. 125.
- (19) Schmidt and Jacobs, p. 175.
- (20) Bennett, p. 158.
- (21) Schmidt and Jacobs, op. cit., p. 177.
- (22) Bennett, op. cit., p. 159.
- (23) French and Hale, op. cit., p. 118.

Bibliography

- J. A. W. Bennett and G. V. Smithers (eds.), *Early Middle English Verse and Prose* (Oxford:Clarendon Press, 1966).
- W. H. French and Charles Brockway Hale (eds.), *Middle English Metrical Romances*, Vol. I, (1930 ; New York : Russel & Russel, rpt. 1964).
- A. C. Gibbs (ed.), *Middle English Romances* (London : Edward Arnold, 1966).
- Fernand Mossé, *A Handbook of Middle English*, tr. by J. A. Walker (Baltimore:The Johns Hopkins Press, 1952; 1961).
- Donald B. Sands (ed.), *Middle English Verse Romances* (New York : Holt, Rinehart and Winston, 1966).
- A. V. C. Schmidt and Nicolas Jacobs (eds.), *Medieval English Romances*, Vol. I (London : Hodder and Stoughton, 1980).
- W. W. Skeat (ed.), *The Lay of Havelok the Dane*, rev. by K. Sisam (1915 ; Oxford : Clarendon Press, rpt. 1967).
- J. A. Burrow, *Medieval Writers and Their Work : Middle English Literature and its Background 1100-1500* (Oxford Univ. Press, 1982).
- William Schofield, *English Literature from the Norman Conquest to Chaucer* (New York : Phaeton Press, 1931 ; rpt. 1969).
- Susan Wittig, *Stylistic and Narrative Structures in the Middle English Romances* (Austin and London : Univ. of Texas Press, 1978).
- Aertsen, Henk and Alasdair A. MacDonald (eds.), *Companion to Middle English Romance* (Amsterdam : VU Univ. Press, 1993).
- Anna Hunt Billings, *A Guide to the Middle English Metrical Romances* (New York : Russell & Russell, 1901 ; 1967).
- L. A. Hibbard, *Medieval Romance in England : A Study of the Sources and Analogues of the Non-Cyclic Metrical Romances* (New York : Burt Franklin, 1960).
- Dieter Mehl, *The Middle English Romances of the Thirteenth and Fourteenth Centuries* (Routledge & Kegan Paul, 1968).
- John Speirs, *Medieval English Poetry : The Non-Chaucerian Tradition* (London : Faber and Faber, 1957 ; 1958).
- John Stevens, *Medieval Romance : Themes and Approaches* (London : Hutchinson Univ. Library, 1973).

- Ward, A. W. and A. R. Waller (eds.), *The Cambridge History of English Literature*, Vol. I *From the Beginnings to the Cycles of Romance* (Cambridge Univ. Press, 1907 ; 1963).
- J. A. W. Bennett, *The Oxford History of English Literature: Middle English Literature*, ed. and completed by Douglas Gray (Oxford : Clarendon Press, 1986).
- J. J. Jusserand, *A Literary History of the English People from the Origins to the End of the Middle Ages* (New York : Gordian Press, 1926 ; rpt. 1969).
- Dorothy Everett, *Essays on Middle English Literature*, ed. Patricia Kean (Oxford: The Clarendon Press, 1955; 1959).
- Renwick, W. L. and H. Orton, *The Beginnings of English Literature to Skelton 1509*, revised by M. F. Wakelyn (London, 1939 ; 1966).
- R. M. Wilson, *Early Middle English Literature* (London : Methuen, 1939 ; 1951)
- H. L. Creek, "The Author of *Havelok the Dane*," *Englische Studien*, 48 (1914-15), 193-212.
- K. E. Gadomski, "Narrative Style in *King Horn* and *Havelok the Dane*," *Journal of Narrative Technique*, 15 (1985), 133-45.
- John Halverson, "*Havelok the Dane* and Society," *The Chaucer Review*, 6 (1971), 142-51.
- R. W. Hanning, "*Havelok the Dane* : Structure, Symbols, Meaning," *Studies in Philology*, 64 (1967), 586-605.
- David Stains, "*Havelok the Dane* : A Thirteenth Century Handbook for Princes," *Speculum*, 51.4 (1976), 602-23.
- Judith Weiss, "Structure and Characterization in *Havelok the Dane*," *Speculum*, 44 (1969), 247-57.